

来日前の留学生のためのICTを活用した日本語学習教材の開発

穂屋下 茂^{*1}、早瀬 郁子^{*2}、城 保江^{*2}、藤井 俊子^{*1}、久家 淳子^{*3}、早瀬 博範^{*4}

Developing ICT-based Learning Materials for International Students before Coming to Japan

Shigeru HOYASHITA^{*1}, Ikuko HAYASE^{*2}, Yasue JO^{*2}
Toshiko FUJII^{*1}, Junko KUGE^{*3}, Hironori HAYASE^{*4}

要 旨

日本に来る留学生が、来日後の生活を円滑にスタートさせるために来日前に基本的な日本語会話能力を習得しておくことは重要なことである。しかも、来日する地域を舞台にした教材であれば、留学生の新しい環境でのモチベーションを高める効果がある。本研究において、佐賀大学に留学が決まってから来日するまでの期間、ICTを活用して、基本的な日本語の学習をしながら、同時に来日前のモチベーションアップを図ることができるとする学習環境の構築を試みた。本稿では、2011年度より開発を行った留学生向け初級日本語eラーニング教材について、開発の背景、教材の特徴や内容、および今後の課題について述べる。

【キーワード】 ICT活用教育、教材開発、日本語教育、留学生、来日前教育

1. はじめに

佐賀大学の留学生は様々な国から来日し、その目的も多様である。来日時日本語能力にもレベル差があり、留学生に対する初期指導は重要である。本学に留学が決まってから実際に留学するまでの期間、学習者の学習意欲を高める必要がある。そのための手段として、Web上での日本語学習が挙げられる。現在Web上で学習できる環境も構築されつつあるので、留学生は渡日前に日本語学校等に通わなくても、学習できる機会に恵まれている。実際、eラーニングで利用可能な日本語学習教材はWeb上に多数存在する。例えば、無料でWeb上に公開されているオンライン教材⁽¹⁾⁽²⁾や、もともと紙媒体のテキストをeラーニング教材にしたもの⁽³⁾⁽⁴⁾、また大学独自に教材開発し来日前後の日本語学習に役立つもの⁽⁵⁾⁽⁶⁾など様々なeラーニング教材が開発され公開されている。しかしながら、どこのWebサイトに効

*1：佐賀大学全学教育機構

*2：佐賀大学全学教育機構（非常勤）

*3：佐賀大学 eラーニングスタジオ

*4：佐賀大学文化教育学部

果的なeラーニング教材があるのか、見つけたとしても教材に含まれる大学生生活情報等は大都市向きで、目的とする地方大学の学生生活情報を含む教材は少ないなど、それぞれの留学生の学習に適した有効なWeb上の教材となると極端に制限されることになる。

本学ではeラーニングスタジオを2002年に設置し、単位の取得できるVOD型フルeラーニング（本学ではネット授業と呼んでいる）の科目を開講している⁽⁷⁾⁽⁸⁾。このネット授業を運用するに当たり、メンターやTAによるサポート経験が豊富になり⁽⁹⁾、種々のコンテンツ（教材）の作成が容易にできるスキルが整備されてきた。この教材作成と運用のスキルを活用して、本学に初めて来る留学生の来日前のモチベーションアップ・プログラムとして、eラーニングを使った日本語学習環境を構築することにした⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

来日前にそれぞれ母国での学習教材としてeラーニングのメリットを最大限に生かした教材の内容に配慮して開発した。本学に特化したもの、すなわち本学の紹介、佐賀の生活や文化紹介等、来日後の生活に円滑に適応できるような内容にした。さらに、来日してから遭遇する様々な場面とそこでの会話をリアルに再現し、日本語学習にふさわしいものにした。この様な教材を用いたeラーニング学習環境を構築すれば、日本語学習と日本留学のモチベーションを高めることができる。本研究では、本学に來ている留学生の来日前の日本語学習や情報取得の状況を把握し、地域大学だからこそ来日前の留学生に役立つと思われるICTを活用した日本語学習環境の構築を試みた。本稿では、教材の概要、制作、学習方法等を説明するとともに、教材作成の過程で生じた問題点やその解決方法についても述べる。

2. 教材開発の背景

本研究では来日前の留学生の状況を確認調査する手段として、日本に来て約半年未満の留学生に対しアンケートによる調査を行った。調査項目は、来日前に日本語を勉強した時間や勉強した機会、はじめて来日したときの不安、本学や佐賀の町の情報を得た手段、知りたかった情報、来日後困ったことについてである。

来日前に日本語を勉強した時間を図1に示す。本調査対象者は、全く勉強しなかった学生と半年未満の学生が約40%、半年～2年以上勉強した学生が約60%を占めている。図2は、日本語はどのようにして勉強したかを示す。高校・大学の授業及び日本語学校で勉強した学生は約60%で、独学（自分で本などを買って勉強）の

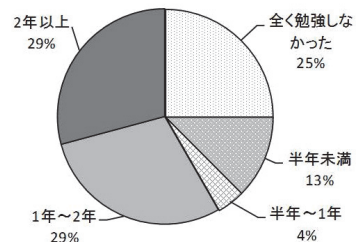


図1 来日前に日本語を勉強した時間

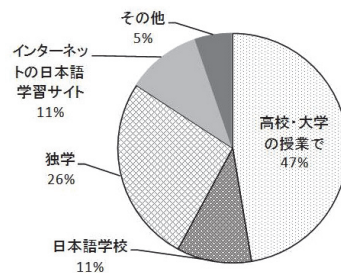


図2 来日前に日本語を勉強した機会

表1 初めて来日する時の不安について

	初級	中級	中上級
問い	日本語Ⅰ－Ⅱ	日本語Ⅲ－Ⅳ	日本語Ⅴ
日本語能力の不安	<ul style="list-style-type: none"> 日本語が分からない 日本人と日本語で話せない 日本語が分からないので専門の勉強ができるか 他の人とコミュニケーションがとれない 自分の考えを話せない 日本語の勉強が大変だと思った 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の日本語が通じるかどうか、会話がうまくできるかどうか 日本語があまり上手でないからちゃんと生活できるか 話すのほいいが読むのが問題 佐賀弁がわからない 聞き取りが出来ない 敬語の使い方がよくわからない 	<ul style="list-style-type: none"> 漢字能力が低い 方言がわからない コミュニケーションがきちんとできるか 授業が理解できるか 論文が書けるか
生活面の不安	<ul style="list-style-type: none"> 文化の違う国で生活できるか 誰の助けもなく一人でできるか 料理の作り方がわからなかった 日本は寒い 	<ul style="list-style-type: none"> 生活や食習慣に慣れるかどうか 毎月の生活費が足りるかどうか 食べ物合うか 	<ul style="list-style-type: none"> 一人暮らしができるか 習慣や風俗などを良く知らない 文化の違いで、失礼な言葉を言わないか 田舎なので退屈ではないか 交通費など生活費が高く
精神面の不安	<ul style="list-style-type: none"> 家族や友達がいらない 自分の国と日本の関係の悪さ 日本語力がないので研究ができるか 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境でうまく生きて行けるかどうか 他の留学生や日本人とうまく付き合えるかどうか 家族と友だちと離れてさびしい 日本人との考えの違い ストレスがたまるのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> 家族が恋しい 日本の生活に慣れるかどうか不安 友達ができるか ホームシック

学生は25%近くいた。特に、注目すべきはWeb上の日本語学習サイトを利用した学生が10%もいたことで、留学を希望する学生の将来の勉強方法を示唆している。

初めて来日する時の日本語能力の不安、生活面の不安、精神面の不安について聞いた結果を、日本語レベルを初級（日本語Ⅰ－Ⅱ）、中級（日本語Ⅲ－Ⅳ）、中上級（日本語Ⅴ）に分けて表1に示す(表1と後に示す表2は、留学生の記述をなるべくそのまま引用した)。日本語の不安においては、初級ほど単純に日本語ができないことが強調され、日本語会話のできる学生ほど内容が深くなり、漢字能力、方言、コミュニケーション、論文などが問題になってきている。生活面や精神面の不安についても、日本語レベルが高いほど、日常的な学生生活というより、習慣や風俗、文化などの違いの不安を挙げている点等が注目される。

表2 来日前に知りたかった情報と来日後困ったことについて

	初級	中級	中上級
問い	日本語Ⅰ－Ⅱ	日本語Ⅲ－Ⅳ	日本語Ⅴ
来日前にどんな情報を知りたかったですか。	<ul style="list-style-type: none"> 日本の生活と文化 佐賀での生活がどんなにいいか 天気 食べ物 生活費はどのくらいかかるか。 日本語は難しいか。1年間日本語を習ったあとでどうなるか。 様々な手続きの仕方 大学の専門の研究、教育システム アルバイトをするために必要な能力 	<ul style="list-style-type: none"> 佐賀の魅力 佐賀のイベント情報 物価はどれくらいか 大学の周りがある店の情報 国際会館の写真 気温 人々はやさしいか 授業の内容や取り方、単位の取得方法 日本のルール、禁止されていること 	<ul style="list-style-type: none"> 風俗と習慣 インターネットでの検索の仕方 手続きに必要なもの 授業内容と受け方 病院の情報と受診のしかた 観光や遊ぶ所
来日後に困ったことはありますか。	<ul style="list-style-type: none"> 日本語 大家さんとのコミュニケーション インターネットが9時までしか使えない 面倒な手続きが多い 寒い時期が長い 	<ul style="list-style-type: none"> あまり友だちができなかった まだ日本語がうまくしゃべれないから何回もバイトの面接に失敗した 体の調子が悪かったとき 	<ul style="list-style-type: none"> 住宅の不便さ(大学の寮に入れればよい) 日中関係が悪いので時々文句を聞く

来日前に本学及び地域の情報を得た手段を図3に示す。「インターネットで調べた」、「友達や先輩に聞いた」、「先生から聞いた」がそれぞれ25%程度いた。表2は来日前に知りたかった情報と来日後困ったことについてまとめたものである。日本語レベルの低い学生は食事や気温などの学生生活に身近な情報を必要としているのに対し、レベルの高い学生は、「授業内容と受け方」、「病院の情報と受診のしかた」などを挙げている点などが注目される。

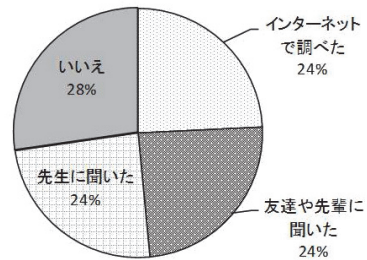


図3 来日前に佐賀の情報を得た手段

以上のような留学生の意見を基に、地域大学だからこそ必要な教材内容や学習方法を吟味し、実際に来日前の留学生に役立つと思われるeラーニング教材の試作を行った。

3. 試作教材の特徴と概要

3.1 教材の特徴

制作する教材は、本学に特化したもの、すなわち本学の紹介、大学やその周辺の情報、佐賀の文化紹介、日本での生活に必要な知識を提供し、来日後の佐賀での生活が円滑に行えるような内容にした。来日してから遭遇する様々な場面での会話をリアルに再現し、実践的な日本語の自習が容易にできるよう、オーセンティックな内容である点で有効である。教材構成は場面シラバスと機能シラバスを合わせたもので、その中に会話に必要な語彙や表現を織り込んで、全く日本語が話せない学生もサバイバル日本語が話せるようにした。

学習は時間と場所を制限しないeラーニングのメリットを生かし、自分のペースで行うことができるように工夫した。1課を1週間の長期学習を想定しているが、1か月の集中学習も可能である。

さらに教材はLMS (Learning Management System) により個々の学習者の学習状況が管理されている¹²⁾ので、佐賀大学の教員が進捗状況のチェックや学習サポートをすることで来日前からインターアクティブな指導が可能であり、学習者のモチベーションの持続・向上が期待できる。

3.2 教材の内容

留学生のための日本語教材の内容一覧を表3に示す。佐賀大学に来ている留学生にアンケートによる調査とどんな情報が必要かをインタビューして、ニーズに合うものをリストアップした。そのリストを参考に留学生が初めて来日したときに遭遇するであろう場面を想定して、「1. 来日」、「2. 国際課事務室」、「3. 買い物」、「4. 銀行で」、「5. 指導教官の研究室」、

「6. 食堂」、「7. 図書館」、「8. サークル」の8課で構成することにした（表3参照）。

1課の「来日」では、佐賀空港での挨拶、佐賀空港から佐賀市までのバス路線での会話、タクシーの乗り方などを、佐賀大学や周辺を紹介しながら日本語学習が進められるようにした。同様に、2～8課においても、来日早々遭遇する場面を順次想定しながら、手続きの仕方、電気製品の買い物、口座開設、食堂での注文、図書館の利用、サークルへの入部手続きなど、大学教育や学生生活の情報を得ながら日本語学習ができるようにした。なお、0課として、他のWebサイトでも良く見られるようなひらがな・日にち・数字の練習も用意した。

表3 留学生のための日本語教材の内容一覧

課	場面	機能	佐賀大学、周辺PR
0		ひらがな 日にち、数字の練習	
1	来日！	挨拶 バス、タクシーの乗り方	佐賀の紹介
2	国際課事務室	道を聞く 手続きの仕方	キャンパスの紹介 学生生活を送るために必要な書類
3	買い物	場所を聞く 電気製品の使い方	大学付近の店の紹介
4	銀行で	口座開設、ATMの使い方	銀行、郵便局の紹介
5	指導教官の研究室	挨拶（先生や学生）	学部紹介
6	食堂	注文する	食堂の使用法、メニュー
7	図書館	本を探す、コピーする	図書館内の紹介
8	サークル	誘う、断る、入部する	サークル紹介

3.3 教材の構成

教材の構成を図4に示す。一つの課は、学習場面のオープニングから始まり、新出語彙、メインの映像による会話スキット、重要表現のリピーティング、会話練習、語彙チェック、演習問題で構成されている。

メインは③の映像の部分で、その内容を中心に据えて①②において場面紹介や新出語彙を提示し、その後④⑤⑥⑦において重要表現のリピーティング、会話練習、語彙チェックや文型演習問題等の学習を行うような構成になっている。第6課で扱う「食堂」を例に挙げて具体的に説

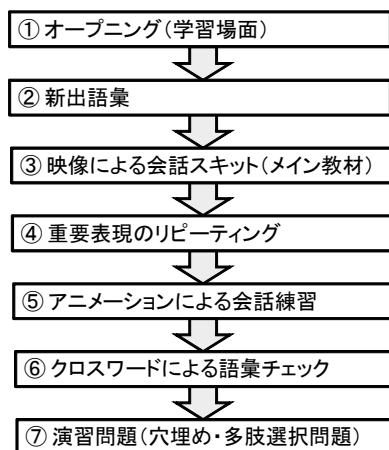


図4 日本語教材の構成

明すると、まず①で佐賀大学の食堂の紹介をする。食堂の場所を地図の中で示し、特色であるTFT (Table For Two) メニューやセルフバーコーナー、ミールカードなど大学生活に必要な情報を提供している。その際内容と量を中級レベルの学習者の聴解力に照準を合わせて、必要な情報のみに削ぎ落とし1分程度にまとめる作業を行った。ナレーションに合わせて建物やメニューの写真などを挿入し、下段にはひらがな文を入れ、さらに英語の訳をつけた。

②では新出語彙を写真やイラストと文字で表示し、音声を聴いてリピートできるようにした。

③では、日常使われている自然な会話を念頭に置きながらも、それぞれの場面で必要な重要表現を入れてシナリオ作りをし、在籍している佐賀大学の日本人学生や留学生に演じてもらった。

④⑤⑥⑦では、その課で押さえたい表現を提示し、学習者が実際に使いこなせるようにリスニング、リピートなど、Moodleを使った問題演習で定着を図れるようにした。

4. 教材の作成

4.1 映像教材の作成の流れ

本教材は、オープニング、新出語彙、メインの映像による会話スキット、重要表現のリピーティング、会話練習、語彙チェック、演習問題から構成されており、全てを同時並行して作成した。映像教材のシナリオ作成や問題作りは日本語教員が担当した。eラーニング化作業は、本学のeラーニングスタジオスタッフと、佐賀大学の講座「デジタル表現技術者養成プログラム」¹³⁾を修了した学生（学生スタッフ）が、日本語教員と打ち合わせを行いながら進めた。以下、本教材で最もエネルギーを注いだ映像による会話スキットの作成について説明する。

映像教材が出来上がるまでの作業は図5のような流れになっている。この教材作成に当たっては、日本語教員とeラーニングスタッフがチームを作り共同作業を行った。ミーティングを重ね何度も修正を加えて完成作品を作り上げた。

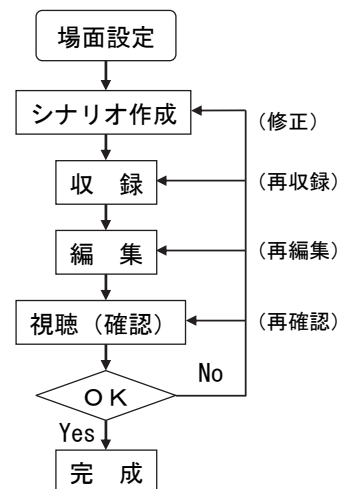


図5 映像教材の作成工程

シナリオを作成していても、学生の自然な会話を尊重したり、逆に学生の自然な会話を留学生が理解できない場合は修正し再度撮り直しを行ったりした。撮影は、主に学生スタッフが担当した。映像教材作成のために、佐賀大学生協で収録している学生スタッフらを図6に示す。eラーニングスタジオスタッフの指導のもと編集作業を行っている。映像教材に関しては、シナリオ作成 → 撮影 → フィードバックという手順で作成していった。出来上がったものを全員が視聴し、画面構成や音声の修正作業を繰り返し、再収録再編集を行い作り上げていった。制作した教材例を図7に示す。

4.2 会話練習教材作成の経緯

会話練習はアニメーションを入れて映像と音声で楽しく学習を繰り返すことを目的とした。当初はイラストの挿入を考えていたが、スタッフの技術でアニメーションを作ることが可能になった。会話練習のロールプレイ画面を図8に示す。

キャラクター数名を固定化して登場させることで統一感を持たせることにした。ナビゲーターの設定もいくつかの候補の中から選んだ。吹き込む声も先生調がいいか学生調がいいか何度も録音し比較検討して選んでいった。会話練習パターンも論議を重ね、日本語指導経験の中から学習効果の高いと予測される構成にした。模範となる会話やリピーティングのスピードは、何度も収録・編集を繰り返しながら調整を行った。結果として、初級者にも中級者からも、適度なスピードであったという良好な評価を得た。



図6 佐賀大学生協で収録する学生スタッフら

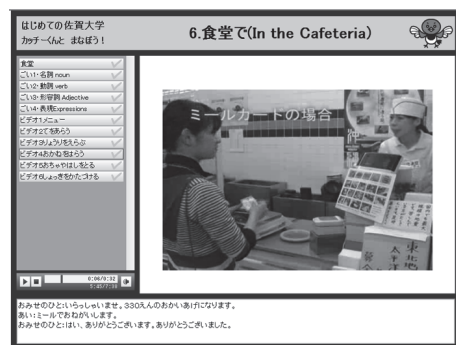


図7 制作した教材例



図8 アニメーションを用いた会話練習のロールプレイ画面

5. 今後の課題

本eラーニング教材のメリットとしては、映像によるリアルな（オーセンティックな）会話場面の再現、留学前のモチベーションの向上、インタラクティブな学習環境などが挙げられる。今後の課題として技術面では、海外の学習環境への対応、学習者のオペレーション技術、海外への配信の対応、使い方のマニュアルの必要性、などがある。また、内容面では、多様なレベルに対応できる教材、学習効果の測定、来日後の授業との関連性、など今後の更なる研究の重要性を感じている。既に来日している留学生に行ったヒヤリングでは、国により法律（ルール）や危機管理意識の違いなども必要と思われるので、今回制作した8課以上に内容の充実を図る必要がある。学習者の音声を録音する機能もあったらいいのという反応もあった。初級者には、文法解説が必要とのことであった。

本学では、VOD型フルeラーニングをネット授業と称し、10年以上前から単位取得できる科目として開講している。ネット授業は従来型の対面授業と同じ、またはそれ以上の教育の質の保障を行えるように改善を積み重ねている。eラーニングは、LMSやコンテンツ教材が整備されただけではうまくいかない。受講者や教員をメンターがサポートする体制が必要である。本学のネット授業が長く続いているのは、メンターによるサポート体制が構築されているからである。本研究で制作した留学生のための日本語学習教材にも、メンターのサポート体制が必要である。しかし、来日する前の留学生にどのようにコンタクトして、どのようにサポートするのか、パソコンのハードやアプリケーションソフト面だけでなく言葉の壁もあるので、日本の学生対象のネット授業よりも数倍のハードルを乗り越える必要があると思われる。

6. まとめ

本稿では留学生向け初級日本語eラーニング教材について、開発の背景、教材の内容、同教材の制作、及び検証に関して、以下の結果と知見を得た。

(1) 開発の背景

- ① 留学生は、来日前の日本語会話等を高校・大学の授業や日本語学校で学ぶだけでなく、Web上で学習している留学生も10%程度いた。
- ② Webを利用することで、母国に居ながら、基本的な日本語会話を学ぶことができ、しかも留学先の情報も得られるという利点がある。
- ③ 来日前の留学生に役立つと思われる会話場面や、そのための教材内容や学習方法を吟味し、佐賀大学と地域に特化したeラーニング教材を試作した。

(2) 教材の内容

- ① 教材は場面・機能シラバスに従って構成し、留学生が初めて来日したときに直面する場面を想定して、8課の教材を作成した。
- ② 一つの課は、学習場面のオープニングから始まり、新出語彙、メインの映像による

会話スキット、重要表現のリピーティング、会話練習、語彙チェック、演習問題で構成した。

(3) 教材の制作

- ① メインとなる映像教材は、佐賀大学のデジタル表現技術者養成プログラムを修了した学生を中心に制作した。出演者は、在籍している佐賀大学の日本人学生や留学生、及び地域住民にこだわった。
- ② 会話場面は、佐賀大学構内や実際の場面を使用し、オーセンティシティー (authenticity) を重視した。
- ③ 会話練習 (重要表現のリピーティング) にアニメーションを用い、親しみ易さを加味した。

(4) 検証

- ① オーセンティシティーを重視した結果、教材に臨場感が出て、学習者への近親性も高まり、モチベーションを高めた。
- ② アニメーションの使用は、学習者の目線で作成することで親密性を高めることが分かった。
- ③ 模範となる会話やリピーティングのスピードは、日本語初級者にも中級者にも適度であった。
- ④ 実際に来日して間のない留学生を対象に本教材のモニタリングを行った結果、本教材が意図した目的が達成されることが分かった。この結果は別に詳細に報告する予定である。

謝 辞

本研究にご協力頂いた佐賀大学留学生センターの教員・職員及びeラーニングスタジオのスタッフの皆様へ感謝の意を表す。また、eラーニングスタジオのスタッフの指導の下で、本格的な映像教材及び様々のeラーニング教材を作成した、デジタル表現技術者養成プログラムを修了した学生スタッフへ感謝の意を表す。本研究で作成した教材がこれから佐賀大学に留学してくる学生の役に立つことを期待したい。

引用・参考文献

- (1) 国際交流基金 日本語教育 教材の開発 : <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/resource/> (2013/03/31アクセス)
- (2) オンライン日本語学習 (無料日本語教材) : <http://study.u-biq.org/> (2013/03/31アクセス)
- (3) げんきオンライン : <http://genki.japantimes.co.jp/> (2013/03/31アクセス)
- (4) JPLANG 東京外国語大学 : <http://jplang.tufs.ac.jp/account/login> (2013/03/31アクセス)
- (5) 西住奏子 : 新規渡日中国人留学生向け映像教材の開発と試行、国際教育、第3号、千葉大学、イ

- ンターナショナル・サポートデスク (2010).
- (6) 中溝朋子：留学生のための日本語初級e-learning教材の開発と課題、大学教育、第6号、pp. 119-126 (2009).
 - (7) 穂屋下 茂、角 和博：第5章eラーニングによる教養教育と生涯学習、大学eラーニングの経営戦略～成功の条件、吉田 文、田口 真奈美、中原 淳編著、東京電機大学出版局、pp. 95-128 (2005).
 - (8) 穂屋下 茂、角 和博、江原由裕、米満 潔、藤井俊子、久家淳子、池上 仁、池田絵美、梶原しおり、朴 逸子、時井由花、古賀崇朗、梅崎卓哉、近藤弘樹：eラーニングコンテンツの制作と多分野での利用について、nime、メディア教育研究、3-2、 pp. 85-94 (2007).
 - (9) 藤井俊子、早瀬博範、マーク・フェルナー、アラン・ボーマン、ダイナ・アンゴウブ、辻 倫子、長峰加奈、久家淳子、穂屋下 茂：eラーニングを用いた英語教育の効果的手法、日本リメディアル教育学会論文集、3-1、pp. 57-62 (2008).
 - (10) 早瀬郁子、久家淳子、藤井俊子、早瀬博範、穂屋下 茂：留学生のための日本語教材の試作、2011PC Conference論文集、pp. 188-189 (2011).
 - (11) 早瀬郁子、城 保江、久家淳子、藤井俊子、早瀬博範、穂屋下 茂：来日前に役立つ留学生のための日本語教材開発、日本リメディアル教育学会第7回全国大会予稿集、pp. 199-200 (2011).
 - (12) 藤井俊子、田代雅美、穂屋下 茂：授業におけるLMS活用の実践事例－LMS利用促進を目指した授業－、コンピューター&エデュケーション、Vol.31、pp. 66-69 (2011) .
 - (13) 穂屋下 茂、中村隆敏、高崎光浩、角 和博、大谷 誠、藤井俊子、古賀崇朗、永溪晃二、久家淳子、時井由花、河道 威、米満 潔、原口聡史、本田一郎、梅崎卓哉：就業力を育む教育実践～デジタル表現技術者養成プログラム～、情報教育研究会講演論文集（京都）、pp. 340-343 (2010).